

# 伊那谷地名研究会通信

第 43 号

発行日 平成二五年八月二〇日  
発行所 伊那谷地名研究会  
〒399-2102  
長野県下伊那郡下條村陽阜七二〇八

## 『伊那谷の地名』発刊に寄せて

伊那谷地名研究会 会長 原 董

本年五月、『伊那谷の地名―風土と人びとを結ぶ文化―』第三輯を発刊しました。多くの関係機関と地域研究に関わる方々より、発刊に寄せて大事な感想をお寄せいただいております。ご協力を戴きました会員の皆さん、原稿執筆をいただきました方々による貴重な実績であります。一層の研究活動と更なる原稿の執筆をお願い申し上げます。

「なぜ地名なのか」が問われているように、地名研究は全国に広まっています。その中で特徴的な研究活動を上げますと、九州熊本県の「災害地名」。三重県では、地域の奥深い歴史に繋がる「忍者に関わる地名」。青森県・岩手県・宮城県の幅広い活動による「アイヌ語地名」等々の研究。この他、全国で幅広い地名研究活動が行われています。

そうした全国的な取組みのなかで、研究による書籍の発刊も行われていますが、当会の『伊那谷の地名』第三輯発刊は、研究活動による数少ない事例と評価をいただいております。

『伊那谷の地名』第三輯発刊に繋がった経緯は、平成一七年一月五日、南信州新聞へ「地名コラム」の初回掲載から毎月三回を欠かすことなく、今日までに三一〇回に届く掲載を、会員みなさんにより積み上げてきた研究活動による実績です。飯田下伊那地域は、「伊那谷」という特徴的な地形に育まれてきた、自然と文化を探究する多くの研究団体の実績が評価されている地域です。

その中で、伊那谷地域の自然・歴史・文化の幅広い視点から地名研究に取り組んでいる「伊那谷地名研究会」活動の集大成の一つである『伊那谷の地名』第一輯・二輯・三輯の発刊は、飯田下伊那地域の研究団体として、大切な取り組みに繋がるものです。会員みなさんの一層の活動をお願いします。

ご指導を頂いております関係機関の更なるご協力をお願い申し上げます。



古代東山道関係の地名と歴史

林 茂伸 会員

「神坂峠」峠は標高一五七六m。付近の山を神坂山と言うのは、この峠にちなんだものである。東山道最大の難所、高所であり、古代より通行困難な場所として名高かった。天下の険「神坂峠」は大変気候が変わり易く、濃霧の出やすく、雷が近い所である。冬季の積雪も多い。

「古事記」『日本書紀』に日本武尊の峠通過の記述がある。尊が濃霧にまかれ道に迷い、白い犬に導かれ窮地を脱出する話は『紀』に出てくる。昭和時代にも、落雷に遭い若人が亡くなり濃霧で道に迷い遭難した高齢者もいた。峠西側の山裾に「霧ヶ原」地名があり、霧の出やすい様子を表したものと云える。

『日本後記』（延暦一八年・七九九）には、「信濃国伊那郡阿智駅の駅子（役人）永く調・庸（税）を減ず。道路剣難なるを以つてなり」がある。「阿智」地名の初出とされる。政府施行細則を定めた「延喜式」（九二七）には「信濃国阿智駅子、課役を免ず」の記載と、更に有名な「阿智駅に駅馬三〇疋」が見られる。何れも「阿智（知）」地名の古さを現している。峠からの途中に「イワガシヤ」「ソバ沢」等の地名がある。

「神坂神社」この神社前の山路が東山道とされる。樹齢一五〇〇年とも推定される「大和杉」の「杉の木群」など幾つかの巨木がさして広くない境内にそそり立つ。上筒男命・中筒男命・底筒男命が祭神。神坂神社名はいつからの事か。江戸時代の絵地図には住吉明神とある。前出三神は海の神様「住吉様」である。なぜこの山中に、海神を祀っているのか不思議である。「杉の木平」中央道恵那山トンネルの排気ガス煙突が二本建つ場所。建設工事のため発掘が行われ大量の土器等が出土したが、この地名とは

直接の関係は無いと思われる。神坂神社東方二〇〇m程にあり、神社と共にいよいよ山間部にかかる最後の平地として位置する。ここからは古代道路跡、石製模造品や古銭・鉄器も出土。大量の中世の土器、緑釉土器や使用痕のある土器、青磁等の貿易陶磁器、硯、この地の性格を規定する物も出土。大量の炭化物と中世とされる五輪塔もあり、神坂峠へ向かう園原最西の平地として、駅馬三〇頭の阿智駅の関係施設等ではないかとも推定される。

杉の木平下流の東側に「児の宮（ちごのみや）」又は「千児の宮」があり、山と園原川に挟まれる地形で、以前は緩斜面の東向きの耕地で、下流の朝日松・姿見池・千代の沢」につながる地であり、園原の西半分の重要な地である。「サブゴヤ」春に多くのカメラマンが撮影に訪れるエドヒガン「義経駒つなぎの桜」がある地域。サブゴヤは恐らく江戸時代の名であろう。

この桜の前を通り、上流「千代の沢」へ、下流は「月見堂」付近へ通じていたと考えられる。「薬師平」木賊刈る園原山の木の間より磨き出でぬる秋の夜の月——月の名所。園原の月見堂周辺から見た観月の詩である。この地区を「薬師平」と言う。堂は本尊薬師如来を祀る薬師堂で、地名はそこに由来すると思われる。木賊は木、漆器、骨等の研磨剤として毎年都に税の調（特産物）として納められた（『延喜式』）。

「園原」県歌『信濃の国』四番冒頭に歌われる名所の地名。神の御坂から本谷の入口まで続く狭く長い僅かの平を言う。「園原」は一体いつから、何を元につけられたのであるか。記録に残る園原の確実な初出は、前出の九〇五年の是則の帯木の歌である。平安初期には「園原」と言う名が既にあつたのである。随筆の名作『枕草子』は一〇〇〇年頃の成立であるが、その中に「原は・・・」という句（くだり）がある。前出の『源氏物語』の歌にも園原が登場する。伏

屋」も古代の歌に登場する。質素な家という意味で、度々、園原とセットで使われる。

「長者屋敷」この地名は、有名な「炭焼き吉次（炭焼長者）」伝説に関係する地名である。吉次伝説は全国に分散しているが、金売り吉次ともいわれ、鶴巻の黄金投げの説話で有名である。この付近にかつてあつた「長者が池」も含めて今後、大いに調査・研究するべき地である。

「大山上の口」「大山上」東山道は「とうさんどう」「とうせんどう」「あずまのやまのみち」等と読むが、「さんどう」「せんどう」は各地で東山道ルート上にある共通の呼び名である。これから下流、東側のルート上にもこの地名がいくつも続いている。美濃に続く信濃の入口に、よくぞ同じような地名が残ったと感銘を受けざるを得ない。まさしく東山道はここを通過していたの間違いはない。

「大山地影」阿智川南岸を園原から網掛山に向かう途中、矢平という数戸の集落に出る手前の山腹を這うように山道が走る。ここが大山地影である。山を南に背負う日の当たりの悪い山間部で、日影と言う地名は良く解る。

「大山地日向」網掛山を西方面に流れる川の右岸を大山地日向と言う。地名そのままの日の当たりの良い所である。

「大山地」「大山地洞川」矢平の集落から網掛山に登る際、割合大きな川が流れている。大山地川である。川の地名になつてはいるほどで、ここを通過していた東山道の大きさがわかる。

「網掛峠」大木の蛇瘤杉があつた標高約一〇〇〇mの峠で網掛山南側の鞍部を言う。網掛地名の由来は「網掛伝説」を上げたい。こうした楽しい説話を始め、物語に漢詩にまた考古品にも大変富む、由緒ある歴史の官道ルートである。

「大垣外」網掛峠から下りてきた最初の平地で屋号にもなつている。かつてこの家の庭の一角で石製模造品が四〇〇点ほど掘り出されたとき、それが、平成九年の発掘で、古道の跡らしき筋

が出、石製模造品が新たに二〇〇点以上出土した。地名は「垣外」地名であり、付近の小野川の関にも近く、近くの畑には「関」の名を彫り込んだ石臼もあり、東山道の昔から中世・近世の「関」まで通して、地域の中心地として交通の要衝地であったことが伺える。

「**仏供田**」無量寺の供物田の意であろうか。

「**堂角**」大垣外から東へ二〇〇m程の下流にある。寺の伽藍の一角を意味するのであろうか。

「**堂の上**」「**堂が入**」等が他地区にある。いずれも寺院等の周辺部の関係地名とされる。

「**昼神**」『延喜式神名帳』に由来を求め、事が多い。東山道を昼神周りとすれば『**紀**』にあるのだからこれも一つの候補であろう。日本武尊が峠を越えようとしていた時、荒ぶる神が尊を苦しめようと白鹿に姿を変え現れ、尊は、噛んでいた蒜を投げつけた所、目にあたり鹿は死んだ。天気一転し濃霧が尊を包み、途方に暮れるが、白い犬が現れ、峠に案内し無事美濃へ。以来、蒜(ニンニク)を噛んだり牛馬に塗ったりすると神の災に当たらないとされた『**紀**』。それで蒜噛み＝昼神と言うようになった。『信州伊那郷村鑑』には以前は「書の島」と呼ばれており、昼神の地名は多くの可能性を含んでいる。

「**曾山**」阿智川南岸の集落。江戸時代「曾山村」と絵地図にある。村として独立している訳では無く、他と同様に駒場町の一部としての構成。

「**四日市場**」「**市場**」「**市**」(一)の**沢**」「**カラハシ**」

古代東山道の人馬行き交う市場地名として上げられる事が多いが、古代には市場が成立するほど人口がないのではないか。おそらくこの地名は、近世になり、駒場の繁栄と街道の賑いの中で生まれたものと考えられる。阿智川を挟み両岸に「**市**」の名があるのは、いつの時代のものであるのか。合流点の下流が「**カラハシ**」。そこで渡河した事はカラハシ遺跡等で伺い知れる。

「**阿智**」明治一四年に「阿知」という村が合併

で誕生し、昭和三一年「阿智」が誕生。『先代旧事本紀』(平安初期)には知恵の神様「天思兼命」と息子の「天表春命」が信濃の阿智に降り立ち、その地の祖となると記されている。『弘仁式』(平安初期・七九九)には、道路剣難なるを持って阿智駅の駅子の税を免ずる旨が記載されており阿智地名の初出である。最も著名な『延喜式』(九二七年成立)には「阿智駅(あちのうまや)」の名と「阿智神社」が載る。この他、阿智(阿知・吾道)の載る古書に『類聚三代格』『倭名類聚抄』がある。この様な文献・遺物から、阿智(阿知)の名は古代、奈良の時代にはあった事は疑いを持たない。

「**阿智川**」阿智の地名の由来により付けられた川の名。江戸時代の絵図に、古くは「駒場川」とあり、時代を経て「阿知川」「月川」とも記される。下條の例もあるのか、阿智川の上流の本谷川も現在「月川」と呼んでいる例もある。

「**駒場**」この地名はいつからであろうか。東山道の駅がある場所としての駒場と考えられるが『延喜式』の駅名は「阿智」で駒場ではない。

その起源をどこに求めたらよいか。戦国最強の覇を唱えた武田信玄は、西上の夢を病に絶たれ、元龜四年四月、「こまんば」で死去した。その場所は、「田口」「根羽」「平谷」「浪合」説それぞれだが、其々の材料で我が地であると主張している。延宝年間の駒場の絵地図に、「駒場町」の記載があるのを見ると、江戸時代は、中馬街道・三州街道の宿場として三河・名古屋への交通で大いに栄えたことが分かる。

「**大品坂**」段差、坂の事を品と言う。大品だから大きな坂と言う事が分かる。木戸脇の平に下町から一気の登りで到達する。標高差約二〇m。ここしか駒場町から木戸脇に上る所はない。その事は現在でも事情は同じである。幅僅か一五〇mの内に、中央自動車道、国道一五三号、旧国道、東山道・三州街道の大品坂の道の四本が集中している。この坂の途中に「あふちの関」

があったとされ、古代の歌に三首残る。

「**木戸脇**」駅馬三〇頭の阿智駅の場所として多くの学者が支持する地である。木戸脇の街村沿いの土地の試掘によれば、およそ一五〇〇年前からの土層が、攪乱も無く明瞭な断面を見せた。安布知神社本殿の貫の裏に、「関城」と言う地名が出てくる。中世の城であろうか、「関のこまんば」にある城は城山があるが、神社の背後にある明灯山が候補になる。

「**関田**」東山道の阿智駅の駅田の地とされる。通常一〇頭の馬を置き公用に使用していたから三倍の馬を保有していたことは東山道八六駅中最大。駅田も最大で、通常の三町歩が三倍の九町歩必要となる。関田は従来湿地で、地名にも「大沼」「金沼」等の湿地を示すものがある。

「**境**」境明神と呼ばれた春日神社に近い、隆法寺境内辺りの中馬街道がクランク状に折れ曲る場所の地名である。

「**なめくり**」(の湯)阿智には湯と言う地名がいくつもある。いずれも断層上にある。

「**智里**・**横川**」「**湯の洞**」清内路峠断層の線上にある。横川集落の西側の沢がそう呼ばれ、天正大地震の「埋もれ木」が出るところである。

「**智里**・**昼神**」「**湯の根**・**湯の瀬**」ご存知昼神温泉である。阿智川が清内路から来る黒川と本谷川が合流する、いわゆる山王権現付近から網掛山の尾根辺りが線源である。ここは昼神断層の一部である。湯屋権現が祀られてきたが、川の氾濫でいつしか高地に移され、湯の事は記憶から過ぎ去られていた。

「**春日**・**七久里**」「**湯川**」古代の歌に七久里(なめくり)の湯が三首登場する。「つきもせず恋に涙を流す哉 こや七久里のいで湯なるらん」(『後拾遺和歌集』一〇八五)。薬湯として有名であったのであろうか。(阿智村駒場)

※紙面都合の為、要約原稿の大幅な削減をお願いし、更に接続詞や改行をなくすなど記述を短縮致しましたことお詫び申し上げます。(編集子)

第59回研究例会 9月21日(土)午後1時30分  
**市民が取り組む**

**「古い地名」の調査**

伊那市生涯学習課 竹松 亨氏

日時 九月二一日(土) 午後一時三〇分

場所 飯田市上郷考古博物館会議室

備考 開場 午後一時一〇分 受付

聴講無料 会員外(一般)聴講可

**発表要旨**

伊那市では平成二四年度から市民の手による「古い地名」の調査を始めました。

その調査への願い、基本的な構想、現在行われている調査の実際、調査のこれから方向についてお話ししたいと思います。

市長は前々から「地名は人々の生活の中から生まれ、人々の生きる知恵や郷土を愛する象徴になってきた」と考え、さまざまな理由によって消えていく「古い地名」を何とか市民の手で残していこうと考えていました。

その願いを受け、始めたのがこのプロジェクトです。まず、次の基本構想を立てました。

- ① 公称地名(大字や小字)や、その他、特徴ある地名の由来と変遷、地区名の由来と変遷を調査する。
- ② 公民館分館の一活動として行う。
- ③ 調査は分館が依頼した人、呼びかけに賛同してくれた人によって行われる。

④ オーラルヒストリー的な方法によって調査する。

⑤ 成果は、地区ごと冊子にまとめるとともに、データを保存し後世に伝える。

実際の活動は昨年一二月、市民の皆さんにプロジェクトを知ってもらったためのシンポジウム『今、なぜ地名なのか』から始められました。

そして今年から西箕輪と東春近地区の一八グループ、一二〇人の人たちによってプレ調査が行なわれています。プレ調査までにどのような経過があったのか、調査する人たちにどのような資料を提供したのかなど、実際の資料をもとお話したいと思います。

この調査は、四年計画で、平成二六年度には全市に広げられます。長年、地道に調査・研究をされてこられた皆様には、このプロジェクトへのご示唆を是非、お願いします。

**第59例会のご案内とお誘い**

研究会長 原 董

伊那市の白鳥市長の提案で、伊那市を上げて始めた地名研究の活動の報告です。

地域行政を挙げて地名研究にかかわる市町村は、現在全国で確認されませんが、伊那市の取り組みは、大切な取り組みであります。

こうした行政の取組みで発足したのが「日本地名研究所」です。昭和56年10月、当時の神奈川県知事長洲一二氏と川崎市市長伊藤三郎氏の提案で、神奈川県と川崎市を挙げて、地名研究に取組まれ、同年、川崎市に「日本地名研究所」が発足しました。この、日本地名研究所の活動

によって全国的な地名研究と、地域研究の広がり現在に繋がっています。

伊那市の取組みは、忘れられ消えて行く地名を掘り起こし、地域文化として大切に人びとに伝えて行こうとする、地域教育・社会教育の充実であります。

このように、伊那市の実践は、地名研究史においても極めて注目すべき営みであります。会員諸氏の出席をお願いいたします。また、会員以外の方も聴講(参加費無料)できます。お誘い合わせてご参加くださいますよう重ねてご案内申し上げます。(問合せ:会長宅・事務局長宅)

**■会務連絡■**

◆第5回伊那谷地名講座(8・31・土)

飯田市中心図書館と共催事業

テーマ『鈴岡城の歴史と地名』

講師 下平 隆司氏(伊那谷地名研究会員)

日時 八月三一日(土) 午後一時三〇分

場所 飯田中央図書館 研修室(二階)

◆一人でも多くの会員の「地名コラム」執筆を!

テーマの一つに『道と地名』の原稿を提案します。道には地名が刻まれ、その地名には地域を育んできた交通・交易による文化、大切な地域が刻まれ、その地名によって地域と、人びとの生活が成り立っています。

◆年会費納入をお願いします(会計:後藤澄壽)

伊那谷地名研究会事務局

事務局 中島正韶 TEL〇二六五(二四)〇一三五  
三九五〇〇〇四 長野県飯田市上郷黒田一九七七  
E-mail naka.jimaya2@clock.ocn.ne.jp